

広東山寇再考

—『中国明朝檔案総匯』を通して—

甘利 弘樹

A Reconsideration of Mountain Bandits of Guangdong
—A Study Based on *Zhongguo Mingchao Dang-an Zonghui*—

AMARI, Hiroki

大分大学教育学部研究紀要 第40巻第1号

2018年9月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 40, No. 1, September 2018

OITA, JAPAN

広東山寇再考

—『中国明朝檔案総匯』を通して—

甘 利 弘 樹*

【要 旨】 本論文は、明末に広東・福建・江西交界地域において活動した広東の山寇の展開過程を再検討することを目的とする。とりわけ『中国明朝檔案総匯』に収録された明朝檔案を通して、山寇の活動の新しい側面を指摘するものである。

【キーワード】 広東 山寇 明朝檔案

はじめに

本論文は、明末の広東で発生した山寇について、近年刊行された明朝檔案をもとに、新しい側面を見いだそうとするものである。

筆者はこれまで、明清時代の広東東北部山間地における山寇の活動を追究してきた。その際、明末の張惟天に関しては、中国第一歴史檔案館所蔵の明朝檔案を積極的に活用することができた¹⁾が、張惟天以外の山寇に関しては、明朝檔案の活用が十分とは言えなかった。しかし明朝檔案が『中国明朝檔案総匯』（広西師範大学出版社、2001）²⁾として公刊され、従来以上に広東の山寇に対して追究することが可能になった。

以下では、筆者が「明末清初期、広東・福建・江西交界地域における広東の山寇 一特に五総賊・鍾凌秀を中心として」（『社会文化史学』38, 1998。以下本論文を「前稿」と表記する）において論じた五総賊・鍾凌秀及び閻羅総³⁾ら山寇の活動について、明朝檔案から新しい具体像を見出すこととしたい。

I 五総賊・鍾凌秀の動きについて

1 五総賊・鍾凌秀の活動年表

まず、五総賊・鍾凌秀の展開過程を、年表形式でまとめると、次の通りである⁴⁾。なお、左端の4桁の数字は西暦を表し、その下に元号を示している。また、それらの右に位置する数字は、月(01～12の2桁)または日(0101～1231の4桁)である。

平成30年5月31日受理

*あまり・ひろき 大分大学教育学部社会認識教育講座（東洋史）

1625 本年 邱囊計が博羅県を劫掠（崇禎 3 年に番禺県で捕獲される）。
天啓 5

1627 本年 福建汀州府武平県米坑・簪菜・岩前・象洞の賊首蘇阿婆・竹篙溜・花腰蜂らが
天啓 7 衆 1000 人を集め、広東潮州府平遠県の謝志良が党を糾してこれに応じた。

1628 01 平遠県の人龔一・龔二・龔三が倡導して、蘇丫婆・頼顛四・花腰蜂・黄満・梁和
崇禎元 尚・鍾成旺・邱南髻・劉勾鼻等数百人が焚劫する。

02 山賊蘇峻・龔義・鍾岳等が衆を聚め、劉勾鼻・鍾掣天等と糾合して鎮平県を破る。

03 平遠県知県金一鰲が胥吏曾紹宗を蘇峻らの下へ派遣し招撫を説かせるが、蘇峻
らの意見はまとまらなかった。

春 龔一などが上杭県に侵入するが、知県呉南瀨によって破られる。

04 ャ婆総数千が安遠県城を攻める。

蘇峻・龔義等が平遠県を攻め、劉勾鼻等は程郷を攻める。蘇峻等は招撫を受ける
が、黎大総・劉勾鼻・鍾掣天は受けなかった。

04・05 ャ婆総（蘇丫婆・邱囊計等）が安遠、信豊、定南の各県に侵入。

08・10 ャ婆総（蘇丫婆・邱囊計等）が会昌県に侵入。

本年 天啓 7 年の集団（蘇阿婆・謝志良ら）が汀州府武平・上杭両県の各地を攻撃。

1629 本年 蘇峻等が賊首陳蠟梨・花腰蜂等と糾合して再反する。
崇禎 2 九蓮山賊瘟瘟総、広賊謝志良が定南県に侵入、謝志良は招撫を受け入れて守備
に任じられる。

1630 本年 流寇鍾三舎が劫掠するが、定南県署知県嚴可象に駆逐される。
崇禎 3

1631 01 陳萬が挙兵し、鍾凌秀が呼応した。

崇禎 4 02 鍾凌秀集団数千が結集して、江西・福建の省境を荒らす。

03 鍾凌秀が惠州の賊陳萬と合体して 2 万～3 万の勢力で、惠州府永安県城を囲み、
海豊県の大安・公平・東海・潘墟を劫掠し、800 人余りを殺す。更に始興県城に
侵入し、その上江西贛州府瑞金県・福建汀州府長汀県に移動して掠奪を行い、長
汀県で汀州府知府林聯綬の派遣した指揮嚴明を捕らえる。

04 陳萬が城を破って県令の荆廷鈺を捕らえる。荆は千金を以て釈放された。

0813 鄭芝龍軍が大埔県三河鎮に到着して、さらに新渡へ移動。

0920 新渡で鄭芝虎軍 500 人が夜襲をかけ、賊の首 14 個を取り、溺死させた人数は
数えきれなかった。また真賊 9 人を捕虜とし、船 45 隻を焼きはらい、馬や器
械も獲得した。

0922 新渡の戦い

0925 潮州府の参将鄭嘉謨が、新渡で賊に夜襲をかけて、大銃で賊の舟を攻撃し、
打撃を与える。賊は新渡にいることをあきらめて、商船を奪って丙村に逃れた。

- 1003 鄭芝虎・陳鵬らが鍾凌秀の行動を読み、兵 300 人で丙村に駐屯。
- 1006 (丙村の戦い) 鄭芝虎・陳鵬の軍約 300 人と鄭嘉謨軍 1000 人が、丙村で鍾凌秀の軍数千と戦い、多数の賊を殺し、馬 27 匹を獲得した。賊は山中に逃れ、婦女・輜重・財物とともに、小突山にたてこもった。
- 1013 鄭芝龍軍が、丙村から出発。
生員李生芬・練総陳明慶ら 13 人の案内を得て、鄭芝虎が小突山に一昼夜かけて向かう。
- 1014 (銅鼓嶂の戦い) 鄭芝虎軍が賊巢に到着し、黄溪沙・南溪壩などの所で戦い、賊を数えきれないほど殺し、馬 35 匹、器械約 1200 件を獲得し、米約 2000 石を焼きはらい、鼎鍋約 1000 口を破壊した。その日の夜に鄭芝龍は、鍾凌秀が住んでいた家宅に一泊した。
- 1015 賊 4000 が攻めてきたが、鄭芝虎がこれを破り、王貴が賊将練二総を長鎗で殺したので、賊は小突山から逕心へ逃げこんだ。
- 1019 広東監軍道洪雲蒸・総兵鄧懋官の軍と鄭芝龍軍が合流。
- 閏 1114 鍾凌秀・陳萬が挙兵し、江西の南埠に突然出撃し、南雄府・韶州府に入って湖広の桂陽県を攻め、水南を荒しまわり、梅関を通過して保昌県の烏逕などの所を攻撃して劫掠し、南雄府に来攻した。
- 本年 広賊の鍾凌秀・復秀兄弟が、瑞金県を 1 カ月劫掠。
- 本年 流寇鍾三舎が、定南県知県陳日炳に駆逐される。

- 1632 0105 参将徐之龍・王鼎・張一傑、遊撃周一陽の軍が、鍾凌秀・陳萬らを魚産地方
崇禎 5 で破り、鍾凌秀は定南県に逃走した。そして張一傑は、遊撃鄭芝龍・潮州府参将鄭嘉謨・都司侯服と合流して追撃した。他方陳萬は、南埠から石窟の樟坑に入るが、参将徐之龍・王鼎、遊撃周一陽らが退路を押さえたために、19 日陳萬は自らの体を縛って降伏した。残党は九連山に逃げこんだ。
- 0127 (～ 0211) 和平県知県周盛典が郷兵を率いて 92 人を捕虜とし、18 個の首をとった。
- 0202 参将徐之龍・王鼎、遊撃周一陽らの官軍が藍州に入り、陳萬の残党がばらばらに鍾凌秀のいる潮州府に移動していることを察知し、4 日、王鼎が段秀墟で残党の追撃を開始した。6 日、残党 600 ～ 700 人が坑下から山中に入り、澳口にたてこもったが、王鼎らが攻撃をしかけ、20 里追いかけると、首 28 個をとり、生功 4 人、賊婦 2 人を捕らえた。更に約 30 里追いかけると、残党で婦女・幼童を捨てられ、入水自殺する者は数えきれなかった。その後賊を追って猪婆寨地方に至り、7 度戦ったが、賊の兵糧が足りなくなっていることを知り、総攻撃をかけて首 70 個をとり、婦女・幼童・旗幟・器械を奪回した。
- 0202 鍾凌秀の降伏。
- 0207 守備曾士英らの郷兵の軍隊が九連山で賊と 5 回戦い、首 113 個をとり、大砲で撃たれ崖から落ちた者は数えきれなかった。また、生功 51 人を捕らえた。一方で官側の戦死者は官郷兵 5 人であった。
- 0210 守備謝志良が、平遠県河頭地方からやってきた流賊約 300 人と戦い、賊の首

約 100 個をとる。さらに壩頭地方からやってきた流賊を破り、賊首白蛇精・劉二総・呉二総とその他 31 人、賊婦 3 人を生け捕りにした。また首 47 個をとり、器械 50 件を獲得した。

03 広賊 1000 人余りが興国県に侵入するが、駆逐される。

鍾凌秀・陳萬が捕らえられる。すなわち賊は河を阻み、巢窟を作っていたが、官兵が四集した。巡道の洪雲蒸が、練総の羅弘功（興国県の監生）を派遣して賊に説かせたところ、鍾凌秀等は自縛して降伏したため、両院に献じた。こうして諸賊はことごとく鎮定された。

0321 鍾凌秀の残党が汀州府に入り、百戸の頼其勲がこれを退けたが、頼は戦死した。

0418 鄭芝龍・鄭芝虎らが、江西の泰和県の冠朝、興国県の綺岡で賊と戦い、首 360（一説に 340）個、馬・器械をとった。冠朝では賊約 200 人を殺し、賊に捕らわれた男女約 300 人を奪回した。これより以前に賊が上杭から南埕に出たところで賊総頼四総・趙什満を擒とし、賊は吉安に逃げ、泰和県に移動したところであった。

0422 東河にて賊約 500 人を斬る。賊は永豊・崇仁・樂安・宜黄各県を荒掠した。

0503 賊が永豊県に入ったところ、官兵がこれに攻撃を加えたので、賊は廬陵県の富田地方に入った。

0626 鍾復秀集団が吉安府永新・永豊県境の牛洞嶺（黄牛峒）で明軍の広東兵のために大半（約 1300 人）が殺害される。鍾復秀は 500 人余りをつれて本拠地の省境山岳地区に戻り、潮州府揭陽県の賊張文彬らと連合し、以後数年、惠州府・潮州府下でひきつづき活動する。

（員子山の戦い）顧元鏡らが員子山を攻めたところ、鄭蛟精・九良星らを捕らえ、賊首の王朝儀は自ら体を縛って降伏した。この戦いで 31 人を斬り、341 人を擒とし、婦女 9 人を捕らえ、器械 155 件、牛馬 67 頭を手に入れた。

09 王業浩らが石窟にて戦い、賊 2000 人を殺害。

潮漳副総兵陳廷対らが、銅鼓嶂・員子山・松源・藍坊などの所で鄭蛟精・九良星ら約 130 人を斬り、郭和尚・水鼈魚蛇ら約 780 人を捕らえた。賊で砲撃によって傷を負い、崖から落ちて死ぬ者は数えきれなかった。

1112 （石窟の戦い）遊撃朱之胤が黄大將ら 102 人を捕獲、4 人を殺し、福建副総兵陳廷対が賊 210 人・婦女 9 人を捕らえ、惠州參將梁東旭は 221 人を捕獲、都司侯服は 10 人を捕獲して向化賊 36 人を招撫し、広東副総兵張一傑は 70 人を捕獲した。

1223・25 福建分巡漳南道顧元鏡が員子山・松源・藍坊などの所で 83 人を捕らえ、器械 21 件、牛 51 頭を手に入れた。

本年 賊首鍾三石が龍南県に侵入、生員許苑の率いる義勇軍を破る。

本年 広賊数千名が吉安府・贛州府の各地を劫掠し、福建と江西の巡撫が共同で追討。

本年 広賊の鍾凌秀が、瑞金県を通過して寧都県に向かう途中、義勇軍と戦い、これを破る。鍾凌秀はやがて明軍に捕らえられるが、その弟復秀は 3000 人の残党を引き連れて長汀県に入って瑞金・雩都・興国諸県と吉安府・撫州府まで劫掠。

- 1633 0115 官兵の攻撃により，張文斌ら 500 人が逃走する。
崇禎 6 0122 官兵が張文斌ら 100 人余りを捕獲し，1000 人余りを殺す。
- 1640 本年 鍾凌秀集団の残党が「長関」を結成し，惠州府博羅県の「土匪」と関係。
崇禎 13
- 1644 04 張恩選が，江西の会昌県などの所を劫掠した後，武平県に入り，守備程章・童
順治元 維新の追撃を受けるが，江西の高嶺で敗死させる。
1018 張肯堂の援兵と賊が戦い，賊は江西贛州府の瑞金県領域に退く。この時，鍾
凌秀（鍾三舍）の余党張恩選という者が，猪婆龍と号し，衆数百人を集め，閻
羅総と遭遇し，これと合体しようとした。しかしこの広東の閻羅総は，張恩選
の党よりも兇暴であり，結局この 2 つの「寇」は互いの威勢に依拠しあった
のみで，ついに合体することはなかった。
- 1645 07 張恩選の党張秤錘が武平県を襲撃し，把総藍綱を戦死させるが，総兵陳秀によ
順治 2 って鎮圧された。
- 1649 本年 張恩選が大帽山に拠点をおく。
順治 6
- 1650 本年 張恩選が郷兵に破れ，平和県に逃れるが，そこで郷兵に撃ち殺される。
順治 7

2 五総賊・鍾凌秀の活動とその特徴

次に上記の年表と「前稿」に基づき，五総賊・鍾凌秀の活動の概要をまとめておく。以下本項の内容は，特記しない限り，「前稿」を典拠としている。

五総賊は，蘇峻・韓元・龔義・鍾岳・湯慶ら 5 人を指導者とする山寇である。彼らは 1628 年（崇禎 2）に仲間を集め，平遠県石窟地方の大密逕に拠点を置いて，その周辺数十里の範囲を抄掠した。蘇峻らは蘇丫婆・花腰蜂・鍾成旺・劉勾鼻ら数百人を糾合して石窟を破り，その勢力は強大化した。五総賊の呼応勢力であった竹篙溜は，捕獲されて尋問を受けた際に，平遠県の隣りの武平県について，「彼の地賊に非ざるは無きなり」と供述したという。

同年 3 月，金一鰲が知県として平遠県に赴任するが，金は蘇峻らが平遠県城を攻撃する意志のあることを知ると，招撫を図って使者を派遣した。このとき蘇峻・湯慶は招撫に応じることを願い出たが，他の賊が招撫に応ずるか否かで意見が対立し，決定しなかった。

4 月，蘇峻らは再び平遠県を攻め，劉勾鼻等は程郷県を攻め，両者は 5 月に平遠県城下に集合した。これに対し金は，10 日間県城の守りを固め，他方で「奸細」杜成文らを捕殺すると，賊はやや畏懼したので，金は再度招撫を図り，その結果蘇峻ら 5 名は招撫に応じたが，黎大総・鍾掣天・劉勾鼻らは招撫に応じなかった。上のように，五総賊と呼応勢力とが異なった行動をとったことは，両者が緩やかな協調関係を結んでいたことを示唆している。

翌日、南贛巡撫洪瞻祖は蘇峻らに把総の位を与え、特に帰順した者であることを強調して「帰順把総」となし、恩に報いるようにさせた。一方招撫に応じなかった劉勾鼻らは、再び程郷県を攻掠して、さらに江西の会昌・定南などの諸県に侵入したため、三省交界地域は震動した。

このとき平遠県知県金一鰲は、郷総謝志良⁵⁾の指揮下で蘇峻・龔義・湯慶・鍾岳の4人を派遣して、かつての仲間劉勾鼻らを討たせ、平遠県は一時安定したが、翌年2月、蘇峻らは再反し、福建の武平・上杭などの諸県を攻掠した。ここに至って、副使謝璉は鎮圧に乗り出し、五総賊の拠点である員子山・梅子畚などの40余りの寨を撃破し、五総賊の勢力はほとんど消滅した。さらに謝の密計を授かった知県の金は、蘇峻ら5人が参謁のため来県したとき、県の役所に伏兵をおいて彼らを捕殺し、その残党もことごとく殲滅した。以上が五総賊の活動の顛末である。

なお、五総賊の活動の特徴として、「不法の秀才」と呼ばれる劉起元・劉起鴻・李璋といった生員たちが、五総賊の暴力行為の後ろ盾の役割を果たし、平日賊と親交を深め、賊が財物を奪ってくれば、いっしょに地面に座って分配していたことが指摘できる。

続いて鍾凌秀の活動をまとめると、次のようである。

鍾凌秀が実際の活動を起こすのは、1631年（崇禎4）のことである。すなわち鍾凌秀は、本拠地を交通の要衝である銅鼓嶂におき、2月に数千の勢力をもって江西・福建の省境を襲い、福建汀州府から江西の瑞金県に侵入した。ここで鍾凌秀は、瑞金県の郷兵組織に大敗して汀州府内に逃げ戻り、その後広東東北部を劫掠した。その過程において、江西さらには湖広に道が通じる交通の要衝である九連山を本拠地とした山寇陳萬と共同することになる。

こうした鍾凌秀集団の活動に対して、官側は遅まきながら、本格的な鍾凌秀の鎮圧に着手した。すなわち、福建巡撫熊文燦の指揮下にあった遊撃鄭芝龍の軍を軸にした官軍が、同年8月から9月にかけての新渡・丙村の戦いで鍾凌秀を破った。新渡・丙村は、韓江と梅江の接点に当たり、船舶の往来が多く、一大商業流通地域に含まれていた。そのことに目をつけた鍾凌秀が錢糧を奪ったり、通行税を取ったりしていたが、こうした活動を停止させたことは、政府としても大きな戦果であったと考えられる。

その後鍾凌秀らは、本拠地である銅鼓嶂にたてこもって陣容を立て直し、10月、4000人を率いて鄭芝龍軍に攻撃をしかけたが、鄭芝龍の弟鄭芝虎に破られ、恐れた鍾凌秀らは銅鼓嶂から石窟へ逃げこんだ。

当時の石窟では、「民」と「賊」とが区別できず、「盜」を駆除することはできても、「民」を安んずることができない状況にあり、「賊を以て俗と為す」と表現され、「賊」が存在していることが日常化していたのであって、さらにその状況が程郷県にも広まっていた。そして「賊」は、劫掠のために出発するときには餞別を持ち、帰ったときには戦利品を運んで、その戦利品によって「強き有力者」と手を結んでいた。こうした状況の下、広東監軍道洪雲蒸・総兵鄧懋官の軍と鄭芝龍軍が合流し、現地軍隊の総結集がはかられた。

たび重なる官軍の攻撃を受けた鍾凌秀集団は、次第にその勢力を弱め、1632年（崇禎5）1月に、陳萬が捕殺されて間もなく、鍾凌秀は招撫に応じ、自らの体を縄で縛って鄭芝龍の陣に赴いて降伏した。その一方で他の残党に対する鎮圧は継続され、首領の白蛇精・劉二総・呉二総らは生け捕りにされた。こうして鍾凌秀主導の反乱は終結したのである。

次いで鍾凌秀集団の残党の活動について言及しておく。

1632年（崇禎5）2月に鍾凌秀の弟鍾復秀が再反した。このいきさつについて鍾復秀は、

官側が鍾復秀の部隊を鄭芝龍の部下にして海上におくことを嫌い、「故地」へ帰してくれるように強く望んだ。しかし官側は鍾凌秀・鍾復秀の再反を恐れて鍾凌秀を捕らえ、鍾復秀を包囲したところ、鍾復秀はその囲いを破って反乱を起こしたのである。

反乱後の鍾復秀は残党を集めて、福建武平県から江西瑞金県に侵入し、その後雩都県境に赴き、さらに興国県から吉安府を通して崇仁県まで至り、その外城を破ってほしいままに放火・殺戮を行った。

これに対して、4月に福建巡撫熊文燦が鄭芝龍・鄭芝虎を派遣し、鍾復秀は泰和県・興国県での戦いで鄭芝龍らに敗れた。その後鄭芝龍らは海賊征伐のために一旦軍を引くが、代わりに広東・江西の官軍が鍾復秀の討伐に当たった。

6月、鍾復秀は吉安府永新・永豊県境の牛洞嶺（黄牛峒）において広東の兵と戦い、勢力の大半を失って残兵とともに出身地の石窟に戻り、潮州府揭陽県の土賊張文斌らと連合し、以後数年、惠州府・潮州府下でひきつづき活動した。ただしその後鍾復秀は官軍に捕殺された。

ところが鍾凌秀集団の残党が全く消滅したわけではなかった。その例として、惠州府博羅県に現れた鍾凌秀集団の残党と張恩選集団がある。前者の分析は「前稿」で行ったため省略するとして、後者の張恩選集団について考えると、その動きは1644年（順治元）から見られる。

すなわち同年4月、大帽山に拠点構えていた張恩選は、上杭県出身で、その部下も上杭県出身者であった。彼らは江西の会昌県、福建の武平県・上杭県を劫掠し、その後も劫掠はとどまらず、10月には江西の瑞金・会昌・安遠・長寧諸県の群賊数千と合体して、武平県に侵入した。このように張恩選が汀州府を中心に攻掠していた時期、当時同地域で最有力な山寇の一つであった閩羅総と合体を試みるが果たせず、その後寧化県知県于華玉の招撫に応じるに至った。

しかし張恩選が于華玉の一部隊として活躍したのは非常に短い期間であったようで、1646年（順治3）の7月に、張恩選は官兵の葛登標を煽動してこれと合し、さらに広東の賊数千人を糾合して、上杭県城を包囲した。このとき城中の民高道化が張恩選集団と内通していたが、このことを察知した諸生黃申龍が高を誘殺し、併せて内応した仲間100人余を殺している。その後張恩選は、1650年（順治7）に平和県で郷兵によって殺され、残党は上杭県でことごとく招撫に応じた。この張恩選の死と残党の招撫によって、鍾凌秀集団の残党と呼ばれた者は、事実上消滅したのである。

II 明朝檔案から見出せる広東の山寇

以上の年表及び「前稿」から指摘できるのは、下記の点である。

- ① 1628年（崇禎元）に広東・福建・江西交界地域に現れた五総賊は、多くの呼応勢力を包容して、移動しながら略奪などを行った。
- ② 五総賊の残党である鍾凌秀は、商業ルート上に位置する河川流域を支配しながら、三省交界地域を広範に移動し劫掠した。
- ③ 鍾凌秀集団の残党には、本拠地の広東東北部から遠く離れた江西北部まで移動する者がいた。
- ④ 五総賊も鍾凌秀も、有力者が山寇の活動をバックアップする行為、すなわち「主窩」行

為が蔓延していた。

これらのうち、①の五総賊の発生については、

（崇禎元年五月）二十七日，就准金（一鰲）（平遠）知県回稱，已撫龔義，蘇俊，鍾岳，韓元，湯慶等訴愿立功贖罪前去，當擒賊總張惟夫正身。二十五日戌時已送到県，乞發官兵獲解。等因⁶⁾。

とあって、五総賊が張惟天の部下であったことが確実視できる。また五総賊の残党である鍾凌秀が閻羅総と手を結んだことに関して、

崇禎四年辛未，九連山大賊渠陳孟雄掘七巢，……又有大賊渠鍾凌秀踞銅鼓嶂，……二渠耽耽虎視，虐焰熏天，始興・永安警報，狎至重，以烏岑南嶺賊首曾閻羅相與響應陳・鍾⁷⁾。のごとき史料に、曾閻羅の名が見える。曾閻羅については、上掲の史料にあるように、崇禎 4～5 年に反乱を起こした陳萬（陳孟雄）・鍾凌秀に呼応したこと、及び広東惠州府にある烏岑南嶺の賊であったことがわかる。また

崇禎四年辛未，賊曾閻王・陳萬・鍾凌秀・鄒涯鼻等流劫三省⁸⁾。

とあることから、曾閻羅と曾閻王は同一人物とみてよいだろう。明朝檔案でも、

崇禎肆年以歲荒聚党在員子石窟之賊則先犯閩地，在九連之賊則先犯贛境，又轉而犯粵地，其率衆出江西龍南入粵，劫虜始興縣城，則九連山賊首陳萬・謝廷桂等之夥党也。其統党入惠攻圍永安縣城，數日為官鄉兵拒擊而退者，則員子石窟賊首鍾凌秀等與惠賊曾閻王等之夥党也⁹⁾。

のようにあり、曾閻王の名がある。しかも

（崇禎肆年）自捌月至玖月集兵柒千，而賊首鍾魁吾，閻羅總，賴大總，張六子，練七諸巢穴，以九戰殲盡而靖惠境¹⁰⁾。

とある史料内の鍾魁吾・閻羅總は、それぞれ鍾凌秀（あるいはその親族）・曾閻羅と見られ、時期から考えて、曾閻王は曾閻羅と同じであり、閻王総あるいは閻羅総（「総」については後述）という山寇の組織のリーダーであったと判断できる。さらに以上のことをふまえて、広東の山寇は、張惟天から閻羅総まで連続して形成されていたことが明らかになるのである。

②・③の活動範囲については、前章で見たように、五総賊については武平県が、鍾凌秀については平遠県石窟と程郷県が、それぞれ賊の蔓延する地域として挙げられていた。明朝檔案には

崇禎伍年拾貳月初參日，奉本部送兵科鈔出南贛巡撫今戴罪陸問札題前事，内称，邇年以来，廣東惠・潮間，無地非賊¹¹⁾。

とあって、鍾凌秀の活動以来、惠州府・潮州府が「地の賊に非ざる無し」と表現される状態になり、山寇の活動が従来の範囲の数倍になっていると認識されていたことがわかる。そのことを示すように、

流賊前後在粵，或經過或屯割劫掠者，如平遠三圳墟，程郷松口丙村，海陽縣太平公館，揭陽縣湯坑・河婆，海豐縣陳田・毘陵逕・高沙，河源縣藍口・康禾，永安縣義容・龍窩，龍川縣通衢・老龍，長樂縣七都，興寧縣水口，始興縣清化司，保昌縣烏逕・魚筌，曲江縣小坑，樂昌縣東郷墟等処，此各賊所流突之地也¹²⁾。

とあるように、襲撃した地域が挙げられている。これには、海陽県や曲江県等のような襲撃記録が地方志に残されていない県も含まれており、鍾凌秀の活動範囲の正確な広さがわかる内容

が含まれている。その活動の内容については、

賊數千數萬劫掠，以求大兵策應，俄而賊退去，有係借途徑行者，有被殺掠而民不以報者。蓋流賊甚狡，過一鄉則廣布一鄉之內應，以劫富濟貧為號，某富民索銀若干，米若干送至賊營，即免劫虜。富者如所索以自完，且以通好於賊，先訂緘口以免後患。其貧者，若男之強有力，輒驅為賊從，若婦女少艾者輿以宣淫公然，於其父母家稱婚姻。其健婦耐長途者，輒驅為舂米薪厨之役。迨越境復虜有若干男婦為從，即以前所虜仍發回里，若其家人有上聞者輒殺之。故被虜之民俱緘口以祈生還。甚且還而挾厚賞¹³⁾。

とあることからわかるように、「劫富濟貧」をスローガンとしていた。これのみで判断すると、山寇は義賊の側面が見出せるが、実際には、山寇の要求に応じ、さらに山寇との関係を口にしない富民は許されていた。一方で貧しい者は、強くて力のある者は賊への従軍を余儀なくされ、婦女子はわいせつ行為を受けて、山寇がその両親に対して山寇と婦女子との結婚を迫った。また、捕虜となった者は、家族が官庁に届けたならば殺されてしまうので、口をつぐんで無事に帰られることを願うのみであり、無事に帰っても金品を要求されることがあったのである。こうした山寇の広範かつ活発な活動状況を生み出した背景として、

臣未任時，破始興，虜県令，蹂躪瑞金・上・武，殺虜衛弁，鋒不可当。臣疾馳到任，問行伍，則僅弱卒貳千，問器械，則僅竹数竿，問糗糧，則月餉且多壓欠，臣從新整頓，更募壯勇，覓廣東能匠，制西洋銃數百門，清核橋稅，催併積逋。繇是壁旌旌旗氣色稍變。臣發兵，壹枝駐龍南，扼九連山，壹枝駐会昌，扼銅鼓嶂。賊壹犯境，輒盡殲之，計經年間，賊未一窺左足¹⁴⁾。

と述べられ、官軍側に兵士の弱さ・少なさ、武器の不備、兵糧不足が指摘された。それに対する対応として、志願兵の募集、広東の有能な技術者による西洋大砲 100 門の整備、橋税の軍事への転用が行われ、その結果として、山寇の拠点である九連山・銅鼓嶂に軍を配備し、山寇の活動を抑制させることに成功したのである。

また鍾凌秀の呼応勢力である陳萬らが鎮圧された際に、

迨閩將鄭芝龍直搗銅鼓嶂，鍾凌秀統全巢之賊，逃入九連，兩夥合一，幾及貳萬。閩兵既歸，廣兵駐和平県嬰城自守，独臣鎮與賊相持，坐困兩月，賊將東走旧巢，北走江右。臣鎮兵將預割南埠，竭力堵遏，遂西走韶州。臣方乘賊之虛，密命將士搗其巢穴，而賊壹日夜走參百里，奄至南安，兵在伍百里外，兵甫到而賊已逕回。臣不勝憤激，責讓虔広道將，勒限殲賊賴師，武臣力遂得懸陳萬於藁街。其樟坑賊総趙什滿為陳萬守門戸者也。臣計令龍南県生員賴上舉・郷総葉再秀・賴錫元縛解正法而餘党殲焉。下藍洲賊総賴肆総為陳萬挈綱領者也。臣計令原任參將金文光・武生金世禎・郷総寥用廷生擒梟示而餘党殲焉。説者，謂九連賊坑穴雖先臣王守仁未克掃蕩，至今始見天日¹⁵⁾。

と記録にある。これによると、銅鼓嶂において鄭芝龍に破れた鍾凌秀は、全拠点の賊をまとめて九連山に入って陳萬と連合し、20000 人の勢力になったという。この後、広東の官軍は動き回る賊の動きに遅れをとり、ついに怒った南贛巡撫陸問礼が、期限を決めて武力による鎮圧を決行したところ、陳萬をはじめ、賊総趙什滿、賊総賴肆総といった陳萬の有力側近を破り、殘党を殲滅したとある。そして最後には、「九連賊の拠点は、以前南贛巡撫だった王守仁が掃蕩できなかったが、今になってはじめて日の目を見たと言える」とあるように、王守仁（王陽明）がなしえなかった平和な状況が創出されたことが指摘されている。こうした状況は、広東東北

部山間地において特筆すべき変化であった¹⁶⁾。

その後鍾凌秀は福建へと活路を見出すが、福建から江西に移動するには、次のような背景があった。

今准副使顧元鏡聞報，鍾凌秀叛撫被擒之後，餘党糾合松源新賊并沿途脅從肆千餘衆，自本年參月拾玖日，入閩武平境。貳拾壹日官兵追至迴龍山麓，奮勇乘勝，雖敵氛少挫，而賴其勲死之。貳拾貳日，粵將謝志良・韓起龍・三凶領兵官童日升合兵夾攻，窮寇多追奔自沈膏鋒鋒者凡壹百伍拾有肆，我兵陣亡者亦貳拾參人，賊乃從湘坑間道，抱首鼠竄。貳拾肆日至長汀・濯田。貳拾伍日至肆都。貳拾陸日至河林。貳拾柒日至長嶺，杭・武兵既躡其尾，勢不反顧，而汀郡守筮繼良又擁兵固守，分防各隘，截其衝突。貳拾捌日，即出汀而入江省。此閩境內殺掠事情¹⁷⁾。

すなわち、鍾凌秀が官軍に捕獲された後、その残党（鍾復秀ら）は、平遠県の松源で新たに賊となった者や脅從者 1000 人余りを率いて福建武平県に入った。彼らは同県の百戸賴其勲を殺したものの、武平県の官軍と謝志良ら広東の兵に挟み撃ちにされ、汀州府長汀県に移動するが、その地で官軍の防備になすすべ無く、江西に移動したのである。なお、武平県の百戸賴其勲は、

雖百戸賴其勲之死，得此一戰，使狡賊不敢長驅入閩，以壹百戸而全閩一帶之城社人民死賢於生。……守備鄧良藩與百戸賴其勲同出擊賊，而一死一生。勇怯攸分，但察是役未獲大勝亦未至大敗。賴其勲自應議卹，鄧良藩姑令降壹級戴罪立功自贖可也。……（崇禎）陸年正月初柒日奉聖旨，……賴其勲准與優卹，鄧良藩姑降一級戴罪立功自贖¹⁸⁾。

のように、鍾復秀を福建で最初に撃退し、福建全体への被害拡大を防いだとして、表彰を上奏され、皇帝に許可されている。

鍾復秀のその後の動きとしては、江西において動き回るが、官軍に敗北し、広東の本拠地へ移動することとなる。これについて、

崇禎伍年……參月降鍾凌秀以清石窟，餘夥數百竄入江右，土賊以貳千附之，遂蹂躪吉，撫諸境。肆月閩・虔・粵有東沔，冠朝之捷。陸月有永豐之捷，而江省底定。柒月而零賊閩人歸閩，虔人歸虔，粵人歸粵¹⁹⁾。

とあり、土賊 2000 人の呼応により、吉安府・撫州府を蹂躪するものの、官軍に敗れて散りぢりになる。このとき興味深いのは、「零賊の閩人は閩に帰り，虔人は虔に帰り，粵人は粵に帰る」とあるように、鍾復秀の集団が、広東・福建・江西各地の人々から構成されていることである。そして彼らが各地に移動する際には、

蓋賊散多岐，或零星分走，徑扮良民，回籍挿居，或數拾為羣託稱鄉兵，潛入窠寨²⁰⁾。

という記録にあるように、良民に扮装するほか、数十の人数であれば、郷兵を名乗って本拠地に戻っていた。さらに策略として、

兩広督臣熊文燦令肅諸軍見督道鎮搜勦賊，似不能為患矣。惟是扮良而歸之賊雜在居民之內，賊党流言妄稱，江閩之兵不分良善，一槩盡勦，致有驚惶欲奔竄者，如程・平・藍坊・松源・金沙・蓼陂一帶民居稠密，万家煙火，零賊間有雜匿於中，儻不分別良惡，設法摘擒，而驟爾加兵則玉石不分，良惡俱遯，遯而聚，聚而流，是驅之為盜也²¹⁾。

とあって、江西・福建の兵が良民も賊も区別せずに追討するという噂を山寇が流したため、良民で逃げ惑う者が増えたことがあったという。しかも良民と賊を分別しないことは、官側も

留意していたことがわかる。

そこで施策として行われたのが、良民と賊の区別である。

広東領兵参将張一傑・福建領兵副総陳廷対各率部兵，裏糧入山，分頭搜勦，凡成羣結夥者皆縛或斬，峒鼓嶂一帶伏莽之戎俱已淨盡。至程鄉之松源等處・平遠之員子山等處之賊，原皆土著之人，自黃牛峒敗後，各散回積。此與銅鼓嶂屯聚之賊不同，当另有消弭之法，不得輕言進勦致玉石俱焚也²²⁾。

とあるのは、鍾復秀が当初拠点をついた地域にいる人々と鍾復秀の残党とを、良民と賊に区別していることを示している。このうち良民については、

又據広東分守嶺南道臣洪雲蒸稟称，敗回餘孽不必問多寡，但有所以弭之，則多亦化於静，有所以迫之，則少亦迫於動，動則曰賊，賊則須用兵以殲之，静則曰民，民則須開諭以懷之。目下当調回閩兵厚集界上，広兵仍厚集，程・平以搗勦之形。職與府県有司多方撫諭婉曲真懇以示安插之形。図之数月時刻不怠，則畏威懷德永収寧謐矣。等因。臣徧詢彼中有司及諸土人，皆云鍾賊餘党自黃牛峒之敗，又經屢次搜殺，及死於饑餓，死於疾病者實已參千餘人，傷足不能步履者柒百餘人，今所存精壯僅參百人而已。就中亦有不願做賊者，鍾党已無足虞會勦之局，自可報竣。但繼起之賊最易繁衍，善後之策所宜亟図，臣以解散安插編保立甲責成²³⁾。

という記録にあるように、以前のように賊に変わることがないように、移動をさせない措置がとられているほか、保甲に編成することが求められている。

一方で、

其参参両両，徑扮良民寧家者無從知其名數之多寡，但其荷戈而入粵者約貳参百人，匿銅鼓嶂深箐，乃計誘白水寨，鵝頸寨，燈塔寨各寨長，令誘匿山之賊收入寨中而後舉兵攻寨，許衆民不傷壹人，只獻出流賊。粵兵生擒壹百貳拾餘名，斬級伍拾餘級。閩兵獲鄭蛟精，賊首斬伍拾餘級，則荷戈而歸之賊會剿已斬無剩²⁴⁾。

とあるように、広東に戻った鍾復秀ら残党は、官軍の策略により、白水寨・鵝頸寨・燈塔寨の各寨に入った後に官軍の攻撃を受けて捕虜になる者や殺害される者がいて、結局残党は消滅することになるのである。

④の「主窩」行為に関しては、五総賊のこととして、以下のような記録がある。

（崇禎元年五月）二十三日，官兵杜登雲，黃大忠遇賊，平遠河頭立斬賊首林顯章，活捉賊副朱子立，訪獲窩賊蕭希仕等伍名。本日，清軍同知戴應豸有心計，預檄信豐縣典史王明惠帶領石背等兵，中途徼賊，賊不測官兵猝至，賊迸徐溪，斬獲何九仔・胡愛江・黃登科，又獲窩家江譽明并奸細多名²⁵⁾。

この中に登場する「窩賊蕭希仕」，「窩家江譽明」は，それぞれ「主窩」行為の担い手を指しているとみて間違いないだろう。前章において指摘した「不法の秀才」と呼ばれた劉起元・劉起鴻・李璋とともに，「主窩」行為が複数，しかも2～3人程度ではない人々が関わっていたことが指摘できる。

この「主窩」行為について明朝檔案では、

臣鄉海寇日殺擄而襲如耳者也。臣鄉之人不言無，有為皇上言之者，亦何從知萬里之外受毒如斯甚哉。其一在澳夷。……其一在外洋寇。外洋者，粵自潮州而下及於陽，電一帶大海，是也。沿海俱是塩場，臣鄉行塩通粵西一省，江西吉，南，贛三府及桂府王塩。塩

商領引、用烏尾大船出洋、船運到省盤驗、而後發行。年来閩寇據截要路、每視塩船大小、勒買路銀三百五百不等、有不從者、即時焚戮其票。……其一在裏海賊。裏海者番（禺）、南（海）、新（會）、順（德）、東（莞）、香（山）等県一帯、交通之小海也。其海皆郡邑、郷城、農工、商賈出入必徑之路、其盜皆本地無頼強悍之徒聚衆打劫。向者黨與不過數十人、船不過二三隻、今以近千為踪、近百為號矣。……最可恨者擄人勒贖、富者千金、百金、貧者亦十兩、五兩、或沉諸水、或試諸刀、刑威萬狀、使其人破家變産、典妻鬻子餽之金而贖其命、破財得命、猶幸也。得其財復殺其命不亦大可憐也。……而大蠹則在窩家、盜無窩主、則所劫之贓誰為寄藏。誰為轉賣。勒贖之人何處停留²⁶⁹。

とあり、広東広州府でも蔓延していたことが記録されている。また

澳夷所恃者巍艦巨銃也。而以閩商之勾連、番哨之名目益肆無忌、為害最深²⁷⁰。

とあることから、閩商、すなわち福建の商人がマカオで「主窩」を行っていたことが見出せる。しかも

洋寇所恃者、内地奸民勾連接濟也²⁸⁰。

とあって、洋寇、すなわち西洋人の海賊までもが「主窩」によって広東の内地の人々と関わっていたことがわかる。

以上のように、「主窩」行為は明末において広東の広範囲に存在していたのであり、「前稿」において言及したように、不法行為の蔓延によって、納税が滞るなどの明朝の財政問題を惹起したと考えられる。

この「主窩」のもとで、「総」という組織が存在していた。五総賊の名称中や鍾凌秀集團の構成員名にもある「総」は、屈大均『広東新語』巻7、人語、永安諸盜に

凡賊有大総、自二総至五総、又曰滿総・尾総、分哨為哨総、禽総演禽者也、書総掌書記者也、旗総職志者也、紀綱諸事曰長幹、衆賊曰散班、其上有甲頭、合数軍有都総。

とある。「総」は上下の関係を定め、様々な職掌によって分けられた山寇の特徴的な組織であり、かつその組織を率いた人を指しているといえる。張惟天の乱では、

惟賊十五総萬參四千人、大総皆異常驍賊、各領千人、小総或百人、或数十人。如伍大総丘囊計等皆戰歿、蘇朝祿等伍総已降贖罪立功二次、張惟天・張会雲・揭廷俸皆就擒、劉鈞鼻皆擒斬²⁹⁰。

とあり、十五総のもとに13000～14000人の参加者がおり、1000人の部隊を有した大総、100人あるいは数十人の部隊を有した小総のごときいくつかの「総」が存在していた。しかし1632年（崇禎5）のこととして、

邇年以來、広東恵・潮間、無地非賊。或聚伍陸百為壹総、或聚壹貳百為壹総、惟陳萬巢九連山、鍾凌秀巢銅鼓嶂、各聚数千人為諸総、冠而諸総皆聽命焉³⁰⁰。

とあり、500～600人あるいは100～200人で一つの総を形成し、数千人で諸総を形成しているとあり、「総」の大規模化が看取できる。

おわりに

本論文で新たに解明したことをまとめると、次の通りである。

（1）五総賊が張惟天の元部下であったこと、及び鍾凌秀が閩羅総と手を組んでいたことが明

確になった。以上のことから、崇禎年間における広東東北部の山寇の活動について、連続性が見出せる。

- (2) 明朝檔案を通して、鍾凌秀の活動が、地方志では判明し得ない広範囲に及んでいたことがわかった。
- (3) 明代広東の山寇に関しては、王守仁（王陽明）による鎮圧以降も断続的に活動が起こっていたが、鍾凌秀と手を組んだ山寇陳萬の鎮圧によって、その活動の終焉が公式に記録された。
- (4) 「主窩」行為は、五総賊・鍾凌秀に限らず、崇禎年間における広東の広範囲に見られるものであった。この行為に基づく山・海のつながりには、福建の商人や西洋人商人も加わっており、活動の規模の大きさが見出せる。
- (5) 広東の山寇における「総」の組織は、巨大化を進めていた。その結果形成された崇禎年間における広東の山寇は、明代において最大規模となっていた。

以上のように、明朝檔案を通して、山寇の活動に関する複数の新しい事実が発見できた。一方で、山寇への対策として、地域社会において実施された新県設置等の行政の動向も、明朝檔案によって明らかにすることが可能である。その新県設置等に関する研究は、次の課題としておきたい。

附記

本稿は、2007年10月30日に台湾暨南大学で開催された「全球化下明史研究之新視野」学術討論会における筆者の発表「從明朝檔案看明末廣東社會」の一部を底稿としている。当該発表の質疑応答の際に、通訳をご担当くださった厦門大学教授高致華氏、ならびに貴重なご指摘を寄せていただいた会場の教員・大学院生各位に深謝申し上げる次第である。

なお、本稿は平成20年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（A）課題番号19202021）による研究成果の一部である。

注

- 1) 張惟天については、甘利弘樹「張惟天の亂について ― 檔案史料の分析を中心に ―」『東方学』97, 1999 参照。
- 2) 明朝檔案については、甘利弘樹「中国第一歴史檔案館所蔵『明朝檔案』及び順治～雍正期の『内閣檔案』について」『満族史研究通信』7, 1998, 同「明朝檔案を利用した研究の動向について ― 『中国明朝檔案総匯』刊行によせて ―」『満族史研究』1, 2002, 及び同『中国明朝檔案総匯』について『汲古』42, 2002 参照。
- 3) 閻羅総については、甘利弘樹「清初の閻羅総について」『史峯』8, 1999 参照。
- 4) 年表作成に当たって主に使用した地方志は、下記の通りである。
道光『永安県三志』6巻 清 葉廷芳・頼朝侶等纂修（中国方志叢書）

- 民国『海豐縣志』13卷 清 于卜熊等纂修・蔡逢恩統修，民国鉛印本（中国方志叢書）
 光緒『海陽縣志』47卷 清 盧蔚猷修・吳道鎔纂（中国方志叢書）
 乾隆『嘉應州志』12卷 清 王之正・陳昱等纂修（東洋文庫所藏）
 光緒『嘉應州志』32卷 清 吳宗焯・溫仲和等纂修（中国方志叢書）
 同治『樂昌縣志』13卷 清 徐寶符等修・李穰等纂（中国方志叢書）
 民国『樂昌縣志』24卷 清 劉運鋒修・陳宗瀛纂（中国方志叢書）
 道光『廣東通志』335卷 清 阮元・江藩等纂修（上海古籍出版社本 1988年）
 光緒『曲江縣志』16卷 清 張希京修・歐樾華等纂（中国方志叢書）
 康熙『惠州府志』20卷 清 呂応奎・黃廷華等纂修（東洋文庫所藏）
 光緒『惠州府志』45卷 清 劉桂年・鄧掄斌等纂修（中国方志叢書）
 民国『揭陽縣正統志』9卷 清 劉業勤纂修（中国方志叢書）
 崇禎『興寧縣志』6卷 明 劉熙祚・李永茂等纂修（国立国会図書館所藏）
 康熙『興寧縣志』9卷 清 王綸部纂修（内閣文庫所藏）
 咸豐『興寧縣志』12卷 清 仲振履原本・張鶴齡等統纂（中国方志叢書）
 民国『始興縣志』16卷 民国 陳及時等纂修（中国方志叢書）
 乾隆『重修鎮平縣志』6卷 清 潘承焯等纂修（内閣文庫所藏）
 康熙『韶州府志』16卷 清 馬元纂修（東洋文庫所藏）
 同治『韶州府志』41卷 清 額哲克・單興詩等纂修（中国方志叢書）
 民国『石竈一徵』9卷 清 黃釗纂修（東洋文庫所藏）
 順治『潮州府志』12卷 清 吳穎等纂修（饒宗頤編『潮州志匯編』（香港：龍門書店 1965年7月）所収）
 光緒『潮州府志』43卷 清 周碩勳等纂修（中国方志叢書）
 民国『潮州志』不分卷 民国 饒宗頤等纂修（饒宗頤編『潮州志匯編』（香港：龍門書店 1965年7月）所収）
 道光『直隸南雄州志』35卷 清 戴錫倫等纂修（中国方志叢書）
 康熙『程鄉縣志』8卷 清 劉広聡纂修（東洋文庫所藏）
 康熙『博羅縣志』7卷 清 陶敬纂修（内閣文庫所藏）
 乾隆『博羅縣志』14卷 清 陳裔虞等纂修（東洋文庫所藏）
 嘉慶『平遠縣志』5卷 清 盧兆鰲等修・歐陽蓮等纂（中国方志叢書）
 乾隆『豐順縣志』9卷 清 葛曙原修・許濟統修（中国方志叢書）
 民国『和平縣志』9卷 民国 羅天桂・徐延翰等纂修（東洋文庫所藏）
 乾隆『安遠縣志』9卷 清 劉定京等纂修（内閣文庫所藏）
 康熙『零都縣志』14卷 清 李祐之等纂修（内閣文庫所藏）
 康熙『會昌縣志』14卷 清 王凝命等纂修（内閣文庫所藏）
 乾隆『贛縣志』55卷 清 黃德溥等修・褚景昕等纂（中国方志叢書）
 乾隆『贛州府志』45卷 清 朱辰・林有席纂修（東洋文庫所藏）
 同治『贛州府志』79卷 清 魏瀛等修・鍾音鳴等纂（中国方志叢書）
 順治『吉安府志』36卷 清 李興元修・歐陽主生等纂（中国方志叢書）
 光緒『吉安府志』54卷 清 定祥修・劉繹纂（中国方志叢書）

- 康熙『興国県志』22巻 清 黄維桂等纂修 (内閣文庫所蔵)
- 同治『興国県志』47巻 清 梅雨田・鍾音鴻等纂修 (東洋文庫所蔵)
- 光緒『江西通志』185巻 清 劉坤一・趙之謙等纂修 (中国省志彙編 華文書局 1968年)
- 康熙『上猶県志』10巻 清 章振萼纂修 (日本蔵中国罕見地方志叢刊書目文献出版社 1992年)
- 光緒『上猶県志』19巻 清 葉滋瀾・李臨馴等纂修 (東洋文庫所蔵)
- 同治『新城県志』14巻 清 劉昌嶽修・鄧家祺纂 (中国方志叢書)
- 道光『信豊県志』16巻 清 游法珠・楊廷為纂修 (東洋文庫所蔵)
- 康熙『瑞金県志』10巻 清 朱維高修・楊長世纂 (日本蔵中国罕見地方志叢刊書目文献出版社 1992年)
- 康熙『続修瑞金県志』11巻 清 郭一豪修・朱雲映等纂 (日本蔵中国罕見地方志叢刊書目文献出版社 1992年)
- 同治『瑞金県志』16巻 清 張国英等纂修 (東洋文庫所蔵)
- 同治『崇義県志』12巻 清 汪寶樹・胡友梅等纂修 (東洋文庫所蔵)
- 順治『石城県志』10巻 清 郭堯京等纂修 (内閣文庫所蔵)
- 乾隆『泰和県志』41巻 清 冉棠等纂修 (内閣文庫所蔵)
- 乾隆『大庾県志』20巻 清 余光璧等纂修 (内閣文庫所蔵)
- 光緒『長寧県志』6巻 清 沈鎔經修・劉德桃纂 (中国方志叢書)
- 順治『定南県志』10巻 清 張映運等纂修 (内閣文庫所蔵)
- 道光『定南県志』8巻 清 頼勳修・黄錫光纂 (中国方志叢書)
- 康熙『南安府志』20巻 清 陳奕禧等纂修 (内閣文庫所蔵)
- 同治『南安府志』33巻 清 黄鳴珂修・石景芬纂 (中国方志叢書)
- 光緒『南安府志補正』13巻 清 楊義纂 (中国方志叢書)
- 康熙『南康県志』16巻 清 申毓来等纂修 (内閣文庫所蔵)
- 道光『寧都直隸州志』33巻 清 黄永綸・楊錫齡等纂修 (東洋文庫所蔵)
- 康熙『龍南県志』12巻 清 閔士傑等纂修 (内閣文庫所蔵)
- 光緒『龍南県志』9巻 清 胡鴻澤修・鍾益馭纂 (中国方志叢書)

- 5)謝志良は平遠県の人で、三省交界地域の地方志に散見するが、時期によって反乱集団側・官軍側で立場が異なる。その存在は順治年間にまで見いだせる。
- 6)「兵部為續報贛兵助剿粵寇獲勝并陳善后事宜事行稿」崇禎元年10月23日, 333頁。
- 7)光緒『惠州府志』巻24, 芸文, 記, 黄士俊「建連平州治碑」。
- 8)崇禎『興寧県志』巻6, 襍紀, 寇盜。
- 9)「兵部尚書張鳳翼等為粵寇敗歸画守編甲會剿事題本」崇禎5年12月28日, 527頁。
- 10)注9)題本, 522頁。
- 11)注9)題本, 514頁。
- 12)注9)と同じ。
- 13)注9)題本, 525頁。
- 14)注11)と同じ。

- 15)注 9)題本, 515 頁。
 16)王守仁(王陽明)の山寇鎮圧とその意義に関しては, 唐立宗『在「盜區」與「政區」之間——明代閩粵贛湘交界的秩序變動與地方行政演化』國立臺灣大學文學院, 2002 参照。
 17)注 9)題本, 537 頁。
 18)注 9)題本, 559 ~ 542 頁。
 19)注 9)題本, 523 頁。
 20)同前注。
 21)注 9)題本, 531 頁。
 22)注 9)題本, 517 ~ 518 頁。
 23)注 9)題本, 518 頁。
 24)注 19)と同じ。
 25)注 6)行稿, 326 ~ 327 頁。
 26)「兵部尚書張鳳翼等為議除粵東海寇鄭芝龍接濟澳夷等弊事題行稿」崇禎 7 年 4 月 22 日, 218 ~ 230 頁。
 27)注 26)行稿, 228 頁。
 28)注 26)行稿, 229 頁。
 29)注 6)行稿, 323 頁。
 30)注 11)と同じ。

A Reconsideration of Mountain Bandits of Guangdong

— A Study Based on *Zhongguo Mingchao Dang-an Zonghui* —

AMARI, Hiroki

Abstract

This article aims to reconsider the process of the movements of the mountain bandits of Guangdong that moved in the border region of Guangdong, Fujian and Jiangxi Provinces during the Late Ming Period. In particular, through the Documents of Ming Dynasty that printed in *Zhongguo Mingchao Dang-an Zonghui*, the new aspects of the movements of the mountain bandits are pointed out.

【Key words】 Guangdong, mountain bandits, the Document of Ming Dynasty